花でつくられた家

宮 岡 真紀子

奨励者紹介〔みやおか・まきこ〕
日本キリスト教団北千里教会牧師
関西学院初等部聖書科講師

だから、神の栄光のためにキリストがあなたがたを受け入れてくださったように、あなたがたも互いに相手を受け入れなさい。

（ローマの信徒への手紙 15章7節）

『3びきのかわいいオオカミ』という絵本の紹介をします。
ユージーン・トリビザス 文　ヘレン・オクセンバリー 絵
こだまともこ訳 冨山房出版 1994年

ある日、3びきのかわいいオオカミがお母さんの家を出て、それぞれの家を建てるのですが、その度に悪いおおブタがやってきて、オオカミの建てたお家をことごとく壊していきます。お家を壊されるたびにオオカミの兄弟も知恵を出し合い、次々に頑丈な城壁のお家を建てるのですが、すべて悪いおおブタに壊されてしまったのでした。そこでオオカミたちは考えます。お花のお家をつくろう、と。そこで、オオカミたちは花でお家をつくりました。するとまた、悪いおおブタがやってきます。オオカミはお花のお家に逃げ込みました。いつものように、おおブタが「フーッ、プーッ」と吹き飛ばそうとして大きく息を吸い込んだとたん、ブタの鼻の中に甘い花の香りがふわっと入りました。なんてすてきな香りなんでしょう。ブタは何度も何度も息を吸い込み、いつの間にか、くんくん花の香りを嗅ぎ始めていました。ブタは、からだじゅうがいい香りでいっぱいになりました。するとブタの心はだんだん優しくなっていきました。そしてブタは歌を歌い、タンバリンを持っておどりだしました。それから、オオカミと一緒に仲良く暮らしました。という物語です。

教会は、かつてのペンテコステの出来事を出発点として始められた共同体です。話す言葉がバラバラにされ、異なる言語をもつようになったということを、聖書は私たちに伝えてるのです。言葉がバラバラになった、という事柄で表現されていますように、分裂に満ちた世界の中で、違いをもつ人々が共に生きる道を模索していく群れ、教会はそのような現実を少しずつでも生きようとする群れだということを、聖書は示しているのです。

教会の子どもの礼拝に出席している子どもたちも、その礼拝の中で、「あさのいのり」というものをみんなでお祈りしています。「かみさま、おはようございます。くらいよるから、めがさめました。かみさま、あたらしい一日をありがとう。今日も家族のみんなをお守りください。好きな友達、好きになれない友達、いろんな友達がいます。一人ひとりを今日もお守りください」と、子どもたちの美しい声で朗々と祈られています。しかし、その言葉の深さ、その言葉の大切さ、そして異文化である他者を受け入れていく難しさなど、

身に染みて反省させられる思いがいたします。聖書の時代の子どもたちは、旧約聖書にありますモーセの律法が刻まれたクッキーに甘い蜜を塗って食べさせられていたと言われていますが、御言葉は、そのように耳に心地よく、また口には甘く響くのです。しかしやがて、腹には苦くなる経験をするという、教育的な意味をもっていたのでした。「腹には苦くなる」の「腹」とは、腹黒いなどと言うように、人間の内側の醜悪で醜い部分、強欲やひそかな悪意など、さまざまな罪を隠しもつ人間の内側を指し、御言葉が人間の腹の底の罪をあらわにし、そのような人間の現実を見据えつつ、そしてそこから神への救いに至ることを教えているのです。

自分を愛するように他者を愛するということができない私たち。受け入れ合うことが大切だと分かっているけれど、できない私たち。自分をまず優先してしまう私たちです。他者を受け入れるということは、耐え難いほどの苦しみです。神がそんな私たち人間を受け入れるために、どれほど苦しまれたのか、それが十字架の上で明らかにされています。十字架の上で見捨てられたキリストと、独り子イエス・キリストを見捨てる苦しみを引き受ける神との間に、言い難い呻きをもって、とりなす聖霊の苦悩があります。聖書の語る愛は、異なっているものを受け入れるために苦しむ愛です。

先ほどの3びきのオオカミが自分たちを守ることだけにとらわれ、バリケードを築くことばかり考えていたように、もともとは、おおブタが悪いからなのですが、オオカミも丈夫な防壁である家を建て、しっかりと鍵をかけることばかり考えていました。私たちにも、時に謙虚さや弱さをまことしやかに装いつつも、腹では堅く心に鍵を閉め、ひそかに排他的な思いをいっぱいにしているということがないでしょうか。花でつくられた家は、ゆらゆらとすぐに崩れてしまいそうですが、風に乗せて、優しい香りをそっとブタの鼻に運んでくれました。

私たちも、小さくてさりげない存在でもいいのです。花のように穏やかなキリストの香りをそっと放つとき、私たちの腹にある心の壁は打ち砕かれ、そこには他者とのまことの交わりが生まれることを信じていきたいのです。

相手を受け入れるということが困難なゆえに、人間はさまざまな過ちを犯してきました。世界に目を向けると、今もなお紛争や争いごとが後を絶たない現実があります。そこには、異質な他者と共に互いを受け入れ合って生きることを放棄した姿がたくさんあります。かつて日本キリスト教団も、成立当初には第二次世界大戦に加担したのでした。そして1967年には、「第二次大戦下における日本基督教団の責任についての告白」が出されました。過ちから学び、聖書の語る愛について、また互いに受け入れ合い、他者と共に生きるということについて深く思いを巡らせることの大切さを考えさせられます。

本日の聖書には、「だから、神の栄光のためにキリストがあなたがたを受け入れてくださったように、あなたがたも互いに相手を受け入れなさい」とありました。「互いに相手を受け入れる」ことなど、キレイごとにすぎないのかもしれません。けれども、この言葉と生涯向き合って生きていこうとするとき、この聖書の言葉は、私たちにとって真理となっていくと私は信じています。そして真理は、私たちを怒りから解き放ち、怒りにとらわれない自由へと導いてくれます。異質な他者を愛し、互いに受け入れ合う生き方とは、どういうことなのか、学校で出会う仲間や先生たちと一緒に、これら聖書の言葉と向き合ってみてください。皆さんの同志社大学での学生生活がより豊かで深いものになっていきますように心から応援しています。

2016年6月15日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録